

第7回ワークショップ「同時代の画家」

MIHO MUSEUM

学芸員 岡田秀之さん

若冲が生きた江戸時代にはたくさんの絵師が京都を舞台に活躍しました。絵師たちの間に交流はあったのでしょうか。円山応挙、曾我蕭白など若冲と同時代の個性と才気にあふれる絵師との係わり、そして江戸絵画の魅力についてお話を伺います。

若冲の水墨画

「竹に雄鶏図」宝蔵寺・所蔵

京都市中京区にある宝蔵寺という寺に伊藤家の祖先の墓があります。2013年11月に確認された若冲作「竹に雄鶏図」は、2014年2月5日から12日まで公開され、1週間で約1550人が来場しました。公開前日に行われた記者発表には、新聞7社、テレビ1社が取材に来ました。

この作品は、お寺で長く所蔵されていたのですが、ずっと偽物だと思われており、ご住職も外には出されなかったものです。去年、調査をする中で、拝見させていただくと、初期のすばらしい作品であることが分かりました。

実は私は第6回のワークショップ(以下WS)に参加し、茄子をモチーフに初めて水墨画を描く体験をしたのですが、自分の描いたものがとても茄子には見えなかった。それまで、若冲の水墨画作品について「この絵は若い時期の作品で、へたくそだ」などと解説していたのですが、この経験から「竹に雄鶏図」が高度な技術を駆使して描かれた作品であることを実感しました。このWS以降、水墨画作品へのコメントが変わってしまいました。

同作品は目も鋭く、胴体の真ん中に筋目を描き、立体的に見せようと工夫がされています。



若冲の弟・白歳も絵を描いた

伊藤家の墓

この寺には、伊藤家のお墓が数基あり、そのなかに若冲の弟「白歳」の墓もあります。約40年前、1971年に書かれた美術史家・秋山光夫先生の論文(「若冲研究序説」)によると、この墓石は白歳が生前に立てたもので、墓の右側面に「つらいつらい花も紅葉もなかりけり」という川柳が刻まれています。

墓の台座はコンクリートで固められていますが、墓石の表面が落ちてぼろぼろになっています。2015年若冲生誕300年の記念の年に合わせて、若冲を愛する皆さんにお参りしてもらえるように修復して、2015年2月8日、若冲の誕生日に法要を行い、数日間一般公開するという計画もあるようです。この事業に関連して、2014年から若冲応援団も組織されました。若冲の弟・白歳もまた、作品を残しています。

白歳「豆腐六歌仙図」

豆腐を切る男性と田楽を焼く女性が描かれています。若冲作品にも歌仙が田楽を焼く姿を描いたものがあります。これも、図版では紹介されていましたが、行方不明になっていました。それが最近になって出てきました。このように若冲の弟も絵を描いていたことが分かっています。

若冲と同時代の絵師たち

応挙、蕭白について

若冲と同時代の画家同士がどのような交流関係にあったのか、実はあまりよく分かっていません。ただし、作品を見ると画家同士の交流が垣間見えるものもあります。顕著なのは、当時日本に入ってきていた中国画・朝鮮画の影響です。以下に、絵師とその作品の特徴についてご紹介します。

円山応挙 (1733～95)

応挙と伊藤若冲 (1716～1800) の年齢を比べると、応挙は若冲より17才若いです。応挙は、現在の京都府亀岡市で生まれています。その後、京都市内に出てきて、狩野派の絵師・石田幽汀 (1721～86) に学んだとされます。その後、中国画家・沈南蘋 (1682～?) の画法や遠近法、陰影法を取り入れた作品に感化されたと言われ、独自の新しい画法を開発し、これ以降の京都の絵師たちに絶大な影響を与えました。

曾我蕭白 (1730～81)

蕭白は52才で亡くなりました。若冲より14才年下です。彼は京都市内の丹波屋という屋号を持つ商家の生まれです。絵師・高田敬輔 (1674～1756) の弟子であったとも言われています。曾我派は、桃山時代から江戸時代初めの曾我蛇足 (生没年不詳) の末裔と自ら名乗り (血筋とは関係ない) 絵を描いていきます。父母を早く亡くし、姫路の辺りを旅して、旅先でも多くの作品を残しました。



円山応挙

応挙の作品

応挙は20代の頃、「眼鏡絵」と言われる作品を多く手がけたことが知られています。「眼鏡絵」とは、西洋画の遠近法を応用して描いた風景などの作品を「覗き眼鏡」をはめた箱を通して見ると立体的に見えるというものです。代表作には「三十三間堂」などがあります。

「三十三間堂」

本堂の遠近を表すとき、伝統的な画法だと、近いものは画面の下、遠いものは画面の上に描きます。遠近関係を上下関係に組み替えて描く作品が多いのです。それを西洋の遠近法・一点透視図法のような方法を使って描いています。覗き眼鏡の穴から覗いて描いていたと言われていています。

「知恩院の桜馬場」

前面が大きく、後ろ (遠く) になるほど小さく描かれています。まっすぐな線で遠近を表す西洋の遠近法が使われています。

応挙の師匠

石田幽汀 (1721～86)

狩野派の流れをくむ絵師です。応挙の師としても知られます。水墨画の技術も勉強しており、狩野派の典型的な描き方、筆を最初にポンと置き強く打ち込み、ツート強弱のある力強い線で描いています。衣服の形や皺を描いた衣紋線といわれる線などが特徴的です。非常に斬新な描き方をしています。

ちなみに若冲も狩野派に習っているとされています。若冲に限らず多くの場合、江戸時代に絵師になる人たちはまずは、狩野派に入門しました。狩野派と一口に言っても永徳、探幽、さまざまな有名人が居ますが、そういうピラミッドの頂点に居る人たちは、幕府・宮中の御用をする人たちです。その下に各藩に仕える御用絵師や、町中で一般人の注文に応える絵師もたくさん居ました。絵を学ぶ一般的な方法としては、町の絵師に弟子入りをしました。

応挙風絵画の流行

応挙没後、江戸時代の国学者・上田秋成（1734～1809）が記した「胆大小心録」（1808年）という本の中に、応挙について触れただりがあります。

上田秋成著「胆大小心録」（1808年）

「絵は応挙が世に出て、写生といふ事のはやり出て、京中の絵が皆一手になった事じゃ。こ

れは狩野家の衆がみな下手故の事じゃ」



応挙は、他の絵師たちと同様に、まず狩野派に入門し絵を学びました。狩野派は手本を写す事が定番のスタイルですが、応挙は手本ではなく、実際の動物や野菜などを見てそのまま描く「写生」に取り組みました。「写生」は大いに流行り、「みな応挙風の絵になってしまった」と上田秋成は記しています。

余談になりますが秋成は自らを蟹と称し「無腸」という号を名乗っていました。ある時、若冲から手紙と贈り物が届きます。手紙には「秋成の蟹を彫った墓石を送っておいたから」とメッセージが添えられていました。実際、秋成の墓石は蟹の形をしています。石峰寺にも蟹の形をした石が一つあります。

応挙の写生とは

円山応挙「四条河原納涼図」

たくさんの人物が涼んでいる様子が描かれていますが、一人一人の姿を描き分けています。下絵を見ると、応挙の描き方の特徴が垣間見えます。人物の場合、着物の下の体をまず描き、その上に着物を描いています。どこでどのようなシワができるのか、まず、体がありそこに服を着せるような下絵を描く。まるで現代の3Dアニメーションのような描き方です。

写生帳もたくさん残っています。相国寺の円山応挙展（2013年12月21日～2014年3月23日）には、素晴らしい作品がたくさん出展されています。

円山応挙「七難七福」

この作品は、滋賀県大津市の歴史博物館の横にある円満院の僧・祐常が描かせたものです。祐常は「観音経」という経を絵にしたいという思いがあったのですが、なかなか実現しなかったところに、応挙が登場し、数年かけて描かせたという詞書きが残っています。

追いはぎにあっている人や寝転んでいる人なども居て、絵としては「難」の方が面白い。「福」はお公家さんがスマートな顔をしています。実際の作品を見てみると、墨で細い輪郭線を取り、主張するような線は引いていません。線で主張するよりも形を全面に押し出しています。

円山応挙「処刑の図」

牛の角から紐が足につながっています。牛の背中に火のついた藁を載せて引っ張らせています。この人物も牛も、ものすごく上手い。

円山応挙「遊女」

比較的若い時期の作品で大石蔵之介を描いています。箱書きからテーマが分かりますが、箱書きがないと、ただの男性3人を描いた作品です。背景も全て無くして人物が3人だけ居るというスタイルは、応挙以降の日本画だと普通ですが、当時としては斬新でした。この作品は、鑑賞の際に教養が要りません。物語のどの場面を描いたか知らなくても楽しめます。後ほど、蕭白の人物図と比べてみます。

円山応挙「虎」

「応挙は見たものを描いた」と言われていますが、虎は日本には生息していませんので、輸入された虎の毛皮をモデルにしています。

昨年、私は西宮市大谷記念美術館で開催した「とら・虎・トラ」という展覧会を手伝いました。タイガースファンが来場するのを期待したのですが、タイガース好きでも虎の絵が好きというわけではないようで、当てが外れました。この展覧会の直前に、「水飲みの虎」と言われる作品が発見されました。長年、美術館関係者が探していた作品です。

虎の鼻の部分拡大して見ると、細胞がひとつひとつ描かれ、毛並みも1本1本細かく描いています。おそらく毛皮で見て写生したのだらうとされています。実際、秋田県の本間美術館では、毛皮をそのまま写した屏風が残っています。おそらく、この作品も毛皮を手本に立体的に描いたのでしょう。

応挙は、竜や虎をたくさん描いています。想像しないと描けないものも、応挙の手にかかると実在するかのようによく描いています。そこが応挙のすごさです。

円山応挙「大乘寺の障壁画」

応挙は人物も温厚だったと言われています。そんな人柄が伺える非常にそつのない、格調のある絵も描いています。晩年には兵庫県霞にある大乘寺の襖絵にも取り組みました。大画面を描かせてもダイナミックで変化のある空間を構成する力も持っていました。

曾我蕭白

応挙と蕭白、作風の違い

円山応挙と曾我蕭白の作風の違いを言い表した蕭白が記したとされる文章が残っています。

「またある時、蕭白戯れに人に対し絵を望めば我にこうべし。絵図を求めんならば円山もんどよかるべし。これもありそな話だ」

「絵を求めるなら、自分に注文しなさい。絵図は応挙に頼みなさい」とあります。蕭白自身の絵と応挙の絵を区別していますが、何が違うのでしょうか。

この文章からは、実際に蕭白が言ったかどうかは別として、江戸時代に蕭白と応挙の作品は違った作風を持っていると認識されていたことは分かります。

曾我蕭白「群仙図屏風」

竜や人物が描かれて非常に書き込みの多い作品です。竜の波、顔、「蕭白＝気持ち悪い」の原因になっていますが、実際は素晴らしい作品です。子どもがたくさん居て、仙人すなわち俗世間を離れた清らかな、聖なるものに俗っぽさを重ねて描く一つの手法です。

まじめな絵も描いています。曾我派の人たちも、元を辿ると中国の水墨画の伝統を受け継いでおり、筆跡が硬い。日本本来の柔らかなタッチの絵とは違ってしています。色鮮やかな秋草などが描かれています。

曾我蕭白「達磨図」

一筆書きの作品もあります。前回の村田先生の話では、当時、大きな筆は日本製ではなかったので、おそらく中国の筆を使い一気に描いています。

同じ方向に反転させ、体の全面を表し、裾の広がっている部分も非常に早い筆で、線そのもので形を表現してしまう。応挙とは全く違う描き方です。

応挙はモノを正確に写すということでは天才的ですが、蕭白は筆一本で全て描いてしまうタイプでした。応挙は丁寧な計算された線を引きました。蕭白は、何も考えずに感覚的にパッと線を引くとそれで形になる。作品中にぐにゅぐにゅと曲がった線がありますが、これは量の上で描いたためにできた線です。通常は紙の下に毛氈を敷いて描くものですが旅先で描いたため毛氈を持ち合わせていなかったのでしょうか。当時は絵師が絵を描くことが娯楽でした。旅先で、宿舎で蕭白の周囲に町の人たちが集まり、量の上で筆を走らせる情景が浮かびます。墨が乾くとだるまの形が出来てきて、最後に顔を描くと「あら、だるまさんでした」となったのでしょうか。即興の楽しみを提供していたのが分かります。

曾我蕭白「孔雀図」

へたくそといえればへたくそですが、私は天才的に上手いと思います。注意して描いている感じではありません。体は右側を向いて、顔は首を90度曲げて左方向を向いています。それを墨だけで表しています。蕭白は、このような作品を描かせると非常に上手い。

曾我蕭白「美人図」奈良県立美術館・所蔵

女性が別れを告げる手紙をびりびりに破いて口にくわえています。悔しさや憎しみを感じさせる表情、色っぽい足下、背景に蘭の花が墨で描かれています。あえてこのように人物だけに色が塗られていて、背後は墨で蘭の花だけを描き、バランスを悪くして、女性の情緒の不安定さを表しています。

蕭白は、浮世絵師・月岡雪鼎の影響を受けたのではないかとされています。

応挙は色を厚く塗っているのに対し、蕭白は薄く彩色を施しています。その方法も表情も全く違います。蕭白の作品は、歌舞伎の一説を切り取ったもので、ストーリーを知っていれば理解できます。

応挙「大石良雄図」と蕭白「美人画」の比較

応挙「大石良雄図」は、背景を全て無くして描いた作品です。先に挙げた蕭白「美人画」と比べて、物語を知らない人でも分かり、多くの人に共感を得るのはどちらでしょう。

応挙は背景を全て無くして、この絵だけで勝負しています。一方の蕭白は、絵の中に含まれているそれぞれのモチーフに意味を持たせています。二つの作品は性格がまったく違います。この辺りが「絵を求めるなら私に、絵図を求めるなら応挙に」という言葉の意図するところです。

絵師たちは互いに交流していたのか

絵師たちの住まい

若冲は錦小路の西側に住んでいました。錦小路の土地の証文の写しの文書が残っており、いくつか所有地があったようです。明治以降は絶記となっていますが、代々引き継がれていました。

応挙は四条通りを南に行ったところに住んでいました。蕪村は四条と烏丸通りの交差点から30メートル行ったところに石碑が残っています。歩いて10〜20分の距離にたくさんの絵師が暮らしていました。

「ちいもはゝも」円山応挙・与謝蕪村合作、海見える杜美術館・所蔵

応挙と蕪村の合作です。このことから相互の交流が伺えます。「猫八応挙子が戯墨也 しゃくし八蕪村か酔画也 ちいもははも猫もしやくしもおとりかな」おじいさんもおばあさんも猫もしやくしもみな踊っているという意味です。蕪村のサインもあります。蕪村の妖怪画は、必ず頭に手ぬぐいを乗せて踊っています。

「蟹蛙図」(円山応挙・与謝蕪村合作、江戸時代)

蛙を応挙が描き、蟹を蕪村が描いています。応挙のはんこが上下逆さまになっているのも、お酒の席で酔っぱらって上下逆さまに押したのでしょう。

木村蕪葎堂(1736～1802)

文人画家・木村蕪葎堂は、造り酒屋「仕舞多屋」の御曹司として生まれたにも関わらず、全くお酒が飲めませんでした。しかし、若い頃から大コレクターで、ありとあらゆるものを集めていました。蕪葎堂の家には、若冲も蕪村も、他の絵師たちも訪れていました。若冲と蕪村の間に交流があったのかは分かりませんが、同じ場所には出入りしていたようです。

蕪村の書いた手紙が500通くらい残っていますが、若冲のことに触れたものはありません。

中国・朝鮮絵画の影響

中国・朝鮮への憧れ

同時期に京都に居た若冲、蕪村、応挙、蕭白など絵師たちはみな例外なく中国や朝鮮への憧れを持っていました。以下に、中国・朝鮮絵画からの影響が見られる作品をご紹介します。

「猛虎図」朝鮮?

朝鮮半島から来た絵画ではないかと言われています。明らかにこれは一対一の関係で真似をしています。背景の枯れ木の描き方、足の配置、しっぽの動き、ほとんどこの作品のまねをしています。体の周りに外隈といわれる墨を入れています。



伊藤若冲「虎図」

プライスコレクションの作品。頭からお尻に向かって細かく墨で描かれています。若冲の作品は編み目模様になっています。ネット上に体の細部が描かれています。中国絵画を学んだという事はこのような作品から分かってきます。

与謝蕪村「虎図」

与謝蕪村(1716～84)は俳句を先にたしなんでおり、当初は、絵は素人でした。丹後地方、天橋立の近くに3年ほど住んだ時期に描いた作品だとされています。蕪村が京都に帰って来た頃、沈南蘋という中国の画家が来日して、一気にこのような絵が広まります。その10年後に蕪村は「虎図」を描いています。何らかの形で中国・朝鮮絵画に影響を受けていた事が分かります。

このように若冲、蕪村、応挙たちが画材として参照した作品には、中国・朝鮮絵画に影響が見られます。

与謝蕪村

伊藤若冲と同じ年

蕪村は、現・大阪都島区の出身です。農家出身で20代前半には世に出て俳諧を学んでいます。俳諧の先生が他界し、27才から10年間お坊さんの格好をして東北地方を回っていました。その後、京都に戻り、結婚

します。俳諧と絵画という二つの分野で活躍しました。伊藤若冲とは同じ歳に生まれ、17年若く他界しました。2015年には生誕300年になります。

同じ歳の若冲と蕪村という天才絵師の特別展を2014年夏にミホ・ミュージアムで開催する予定です。若冲展としては、2008年に発見された「山水図屏風」や「象と鯨図屏風」も出品予定です。

与謝蕪村「俳画・学問は尻から抜ける蛭かな」

絵の上に俳句を書いて、絵と俳句が響き合うような作品をたくさん残しています。

全く勉強にならないという意味と、夏は蛭の光で勉強し、冬は雪に反射する月明りで勉強したという意味がかかっています。自画像だとも言われています。



【質疑応答】

Q. 「象と鯨図屏風」はどのように発見から展覧会に至ったのですか？

A. 2008年秋、写真付の手紙がミホ・ミュージアムに北陸地方から送られて来て2009年9月の展覧会で展示しました。修理の専門家の目によると、乾燥し表面の繊維が立ち柔軟性を失っていた。タバコなどの長年の汚れが表面に付いているとのことでした。水を通し紙の繊維を寝かせて、修理することになりました。

Q. 「竹に雄鶏図」はどのようにして本物と鑑定されたのですか？

A. 美術館の学芸員は、鑑定はできません。しかし手がかりは「はんこ」にあります。はんこは若冲40代の頃に使われたもの。丸いはんこは50代になると少しかけています。年代の入った作品に押されたたはんこを調査し年代を推定しています。

偽物はたくさんあり、微妙なものもたくさんありますが、この作品に関しては、見た瞬間に若冲だと分かりました。立体的で羽の部位により模様を描き分けようとしています。同心円上で描き方を変える手法なども若冲の独自の技法です。贋作ではありえません。

ご住職は大変驚かれ、喜ばれました。若冲ゆかりのお寺なのに若冲作品に会えないのは残念だと思っていたところ、実は在ったということでプレス発表され、騒ぎになりました。近年の若冲ブームは、展覧会に若冲が出て入れれば来館者数が増える傾向があります。美術館・博物館だけではなく、若冲ゆかりのお寺も一緒に活動し、盛り上げていければと考えています。

Q. 石峰寺にある蟹の石碑はどの辺りですか？

A. 詳しくは説明できませんが山の中腹右側です。

(感想)

絵師たちの作品を見比べると、同時代の画家たちが互いに影響を与え合いながら、時代の文化的空気の中で、各々の作品を描いていたことが分かりました。それらの作風にはひとりひとりの個性がひかり、才気あふれる絵師たちの筆をふるう姿が作品から伺えます。